



「自然と人との調和ある豊かな山づくり」を目指す

清光林業株式会社 大阪市浪速区

清光林業株式会社は、昭和 25 年 2 月、先代の岡橋清左衛門氏により設立され、現社長の岡橋清元氏が、昭和 55 年から、同社直営林に作業道を開設し、林業機械を導入した近代的林業経営を始め、現在に至る。

岡橋社長は、昭和 55 年、自ら師と仰ぐ大橋慶三郎氏が考案した「大橋式林内高密度路網」の整備に着手し、その総延長は 78,000 メートルに及ぶ。現在も高密度路網を開設（年間 3,000m）しながら、育林、素材の生産を積極的に行っている。この工法は、生産性の向上だけにとどまらず、自然環境の保全および自然災害の防止等にも配慮した工法として高い評価を得ている。

これらの林業経営が評価され、岡橋社長は、平成 7 年度農林水産祭林業部門で内閣総理大臣賞を受賞した。また、同社は平成 19 年 3 月に「SGEC 森林認証*」も取得している。

*SGEC 森林認証システムは、日本の森林管理のレベルを向上し、豊かな自然環境と持続的な木材生産を両立する、健全な森林育成を、独立の第 3 者機関が保証するシステム。

会社概要



会社名：清光林業株式会社
所在地：大阪市浪速区幸町 2 丁目 2-20
支社：奈良県吉野郡吉野町飯貝 701
電話：06-6561-1513 (代)
FAX：06-6561-9307
設立：昭和 25 年 2 月
代表者：代表取締役 岡橋 清元
資本金：1,000 万円
従業員：11 名
事業：林業、不動産管理業



清光林業 本社ビル



「岡清山」所有林を証明する墨付

吉野独特の施業「密植・多間伐・長伐期」を堅持

同社の創業家である岡橋家は、代々、奈良県橿原市小槻町で庄屋を営んでいた。江戸時代中期から所有していた吉野の山林は、昭和初期にほぼ現在の面積（約 1900ha）にまで拡大していた。

同社および岡橋家個人の所有する山は、岡橋家当主の名前に因んで「岡清山」と言われており、吉野林業の中核地帯である吉野町、川上村、東吉野村、上北山村の 1 町 3 村に分布している。吉野林業地帯のなかでも立地条件のよい山が多く、いわゆる銘木級の高齢林が多いのが特徴である。

吉野林業地帯は杉が多く、「密植・多間伐・長伐期」という吉野独特の施業で育林されている。1ha 当たり 8,000 本～10,000 本（通常の数倍）の苗木を植え、生長のスピードを抑制することで年輪を密にし、間伐を繰り返して本末同大（根元から先までほぼ同じ太さの木）、節の少ない心材部の色がピンク色に近い大径木の吉野杉を生み出している。この吉野杉の心材独特の持ち味によって、吉野材（ブランド）として市場で珍重されている。

このような吉野独特の施業は、山守制度により支えられ 300 年近く続いてきたが、山守の高齢化、安価な輸入材の増加、木材需要の低迷等、厳しい経営環境の中でこの施業方法を維持していくことが、非常に困難な状況が続いている。

また、吉野地方の山林は、急勾配であるため機械化の導入がむずかしく、昭和 50 年代からはヘリコプターによる出材が主となってきた。しかし、ヘリ集材は出材コストが高く、間伐材の放置等山林保育にも悪影響を及ぼしていた。

当時を振り返り、岡橋社長は「出材経費の高いヘリコプター集材は中長期的に通用しない。経費を抑えて利益を確保し、次世代の吉野林業を確立する方策を必死に考えた。自分でも重機の免許を

取得して路網づくりに挑戦したが失敗に終わり、最終にたどり着いたのが“大橋式林内高密路網”の整備であった」と語っている。

同じ頃、大橋氏から“人任せにするな。逃げたらあかん”と苦言され、それ以来、同社単独で30年前から高密路網（従来よりも高密度かつ低コストの作業道）の整備に着手し、現在も開設を続けている。

その結果、育材費用や木材搬出コストの削減、自然環境に配慮した施業が可能となり、同社は、吉野独特の施業方法である「密植・多間伐・長伐期」を林業経営の基本として堅持しつつ、山林の荒廃を防ぎながら良質材の生産を堅実にやっている。

「大橋式高密路網」の導入で生産性等が向上

同社が採用するに至った、大橋氏の山林経営の概念は、森林を疲労させることなくコストを縮小し、利益率を高めることにある。また、育林環境を整えることで優良材を育てつつ、より優良な間伐材の生産を可能にすることである。

日々の管理や間伐を簡便かつ低コストで行うためには、熟練作業員以外でも作業を可能にする必要がある。そのため、架線集材等は極力行わず、小型車両系機械などの導入が可能な路網の整備を進めることが不可欠となる。

従来の作業道は、地山の土を切り谷側に盛るだけで作設するが、大橋式高密路網では路盤下に間伐材の構造物を施工する。これにより路体の安定性が増し、路肩の崩壊を防ぐことができる。更に数年で草が生え、約5年経てば元の自然の状態に戻るため環境にも優しい工法となっている。

同社は、高密路網の整備とともに機械化や作業



小型トラクターショベルをベースにした機械での集積（上図）、小型バックホーをベースにした機械での積み込み（右図）

のマニュアル化等を進めることで、「素人でも作業ができる」環境が整い、人材の確保・育成が容易となった。多少の雨でも作業が可能のため、年間の勤務日数が安定しており、業界では珍しい月給制、週休2日制を導入している。

現在、同社の半分近くを占める直営林において「高密路網」を整備し、林業機械を導入した近代的林業経営を行っている。残りの山林は、慣行的林業である「山守制度」によって支えられている。

吉野材の情宣活動及び地域社会との連携

同社は、SGEC 森林認証を受けた社有林に各種団体の研修会や見学会を積極的に受け入れている。大橋氏の一番弟子である岡橋社長自らが、①大橋式林道作設法に心酔し30年間一筋に高密路網の整備を続けていること、②「壊れない、壊さない、いつでも使える林道づくり」に心掛けていること、③路網整備で一番難しく神経を使う、路線選定で避けなければならない地形的特色、④環境保全面からみた高密路網整備の重要性等について説明を行っている。



社有林にて大橋式丸太組工法を説明する岡橋清元社長

また、吉野材に対する関心を深めてもらうために、各地の工務店や消費者を同社管理の山林に案内し、吉野独特の施業である「密植・多間伐・長伐期」の特徴や、同社の取組み〔地球温暖化の防止、水土保全、生物多様性（多様な生物種の共存）の保存〕を認識してもらう活動も行っている。

一方、地域への貢献として、地元の高校生に対して林業機械体験研修を行ったり、川上村が主催するきこりの技術を競う「そまびと」大会に参加するなど、地域社会との連携を大切にし、地域社会における役割と貢献に配慮した事業経営にも取り組んでいる。

（鶴山吉永）